

## 俳句

### 春雜吟

三月十五日、碧梧桐氏、大幸田に來遊、同地の有志、之を公會堂に迎へて句會を開く。予、滴人、岳童の二兄と共に行いて之に列す、細雨霏々として柳絮を霑し、南苑の春色、詩興を呼ぶ事頗なり。乞うて此句を得、依つて之を本誌に載す。

(水郷)

碧梧桐

躑躅甘き香の露にり雉ないて  
雉なくや谷の尾感む丘だゝみ  
雪も所々樺の枝鳴りを立つ雉か  
雉なくや鍬目もかほど國大野  
雉なくや八つ晴機の山秩父  
木母寺に庵りてや案す柳筆  
梅柳身は飛梅の名残りとも  
やがて住む柳堤も見榮にゐて  
井一つ二の中の島柳哉

文苑

橋柳と見るに塚木の謂れあり  
本人より便の鳩や夕霞  
宿命論を制す積徳の意かすむ  
史微聞けて洞窟聞ゆ霞かな  
貝化石と鳥船の事と湖かすむ  
袋旗海貿易の眼にかすむ  
雛の日の寄り昆布長を結はん物  
貝雛とこそ長袖の磨り模様  
道中雛右富士の松むら立て  
雛立てゝ見まさるを云ひ淀まずも  
紙礫打たるゝ雛か下座に居て  
○  
近まさる思ぞればろ打つ櫓  
聖生るゝ風情に朧ろめく野かな  
瀬戸潮に聴じわり唄にねばろ舟  
人隠すた山朧ろも神業や  
陣客の朧ろ矢文に酬うる詩

山

靜

湖に吞まる、隴ろぞと山の晴れ際を  
行人に遊山一座をねばろにす  
隴ろ吹く風ハタとなく襲ふ夜氣  
食乞も大悲の國土ねばろにて  
隴汲む水とぞ閭門人よるや

○

滴

人

底見れば雲母<sup>キラ</sup>石姫川長閑  
山鬼唄ふ聲かと川瀬長閑さよ  
樋の音波夢神呼ぶかに長閑さや  
長閑さや砂場堀る濱沖はれて  
史の長閑野鶴見るとぞ録しけり  
川峽を出で、山容に浮く長閑  
大鵬の海縫ふねばろ眞晝風

○

水

郷

隴ろ賦すも母系に負ひし才ならん  
堂隴ろ附たり供養人質に  
軒端蜘蛛一絲を走るねばろ哉

畑ねばろ鼠害兎害の取沙汰も  
あらぬ褒辭聞く耳鳴りを隴ろかな  
柱くやりもして結願や堂隴ろ  
花曆洋種に疎し園ねばろ  
園ねばろ花占見んも戀なれば  
斑にめで、鷹羽百年青や隴なる  
着心地もねばろを裁ちし衣ならん  
漁期となる獵期名殘や國ねばろ  
牧も所々荒蕪平蕪を國ねばろ  
史料屑寄せて童話や春の風  
異な汚名晴れし祝酒や春の風  
賣文子鉤單を春の風に撫づ